

# AI法律相談室



## 第5回 AI弁護士と人間弁護士のこれからを考へてみる

ご購入はこちら

かなめ総合法律事務所 弁護士：戸木 亮輔ときりょうすけ

### ● 弁護士業界をにぎわす AI 事情

人間の仕事はAIに奪われてしまうのかという議論が盛んに行われています。弁護士業界でも同じです。

約2年前、米国の大手法律事務所が、弁護士の判例検索などの作業を効率化するため、IBM Watsonを利用したAIソフトウェアROSSを採用したというニュースが業界をにぎわせました。

この原稿を執筆している間にも、イスラエルのベンチャ企業 LegaLogicが開発したソフトウェアLawGeexが、秘密保持契約書の法的チェックについて、経験を有する弁護士とAIを対決させたところ、AIが勝利した(弁護士の精度85%：AIの精度94%)というニュースが話題になっています。弁護士は契約書のチェックに平均92分を費やしていたのに対し、AIはたったの26秒と、速さでも勝ります。

### ● 人間の弁護士がAI弁護士に勝るところはあるのか

AIが法律的な相談に対して正確かつ迅速に回答できるようになったら、皆さんはAI弁護士に法律相談をしたい、悩みを聞いてほしいと思いますか？

法律の解釈が確立していて、相談したい事柄を当てはめて正しい回答が導き出される場合は、AI弁護士で対応可能でしょう。しかし、法律は時代の変化に合わせて見直されます。法律自体が変わらなくとも、解釈によって適用範囲が変わることがあります。

形式的には法律では認められないけれども、法律に従うと不合理な結果となる事情があった場合、AI弁護士はその事情を理解して「法律では形式的には認められないけれどもトライしてみましょう」とか「同じ境遇にいる人を集めて、国会に法改正を求めていきましょう」といった提案をしてくれるでしょうか。

### ● 法律や判例に鑑みるだけが弁護士の仕事ではない

ここで1つ、事案を紹介したいと思います(架空の事例)。とある高齢者Xが、1人息子Yを交通事故で亡くしたことで相談に来ました。Xは、保険会社から支払われる賠償金やYが生前持っていた遺産を自身が受け取れると思って手続きをしていたところ、Yには離婚した元妻Wとの間に子Zがいたため、Zのみが相続人になり、親であるXは相続人とならず、ほぼ全てをZ(とW)に持っていかれた、ということでした(親族固有の慰謝料などの論点はあるが誌面の都合上

省略する)。

WはZを産んで間もなく他に男を作って逃げ、それ以降YはZの消息すら知らなかったという事情のため、Xは「Zに賠償金や遺産が引き継がれるのはおかしい。同居していた私が一番悲しいはずだし、金銭的な補償も私にされるべきだ」と涙ながらに訴えていました。

法律的には、相談者は相続人ではないため、賠償金や遺産を引き継ぐことはできません。AI弁護士ならそのように即答するでしょう。しかし、相談者の心中は穏やかでしょうか？

弁護士は、結論だけを即答して相談を打ち切るようなことはしません。30分、時には1時間を超えて相談者の話に耳を傾け、うなずき、共に悲しみ、相談者の置かれた境遇を十分に理解した上で、法律的には認められない主張や金銭的にはプラスにならない行動でも、心情を相手に伝えるとか、加害者の刑事事件に出席するなどして、結果的に相談者が精神的に安定し、納得感が得られる方法を探すべく寄り添います。

### ● AI弁護士の将来

このような、金銭的にはプラスにならない、一見すると無駄に思えるような作業をAIが代替できるとは考えられていません。解決できない問題であっても、共に悩み、ゴールまでの過程・時間を共有するからこそ、相談者の悩みが解決・緩和されるのであり、そういう仕事をするのが弁護士の使命だと思います。

しかし個人的には、いずれはAIも相談者の複雑な悩みを解決・緩和することが可能になると考えています。室内外の至る所に備え付けられたカメラやセンサーが人間の行動や声を把握し、センサ付き全身タイツが体温・血流を計測し、センサ付き眼鏡が瞳孔の変化を捉え、それらをビッグ・データとして蓄積していくと、人間が何かを体験したときに、その人間にどのような体験(言葉とは限らない)を与えれば、また、どれくらいの時間を費やしてどのような過程を経れば、その人が最も精神的に落ち着くかを個人別に解明し、AIやロボットがその体験を実現してしまう将来もあり得ると思うのです。

そんな話を知人にしたら、次のように指摘されました。「そのとき、人はAIの子を産むようになります」と。遠い将来であるように思いながらも、弁護士の本質は何か、人間の本質は何か、本業そっこので考えてしまうのでした。